

DNA シーケンサー

DNA シーケンサーの説明文書の英訳依頼がきた。

「ゲッ、DNA 解析なんて超専門的！ わたしにわかるんかいな？ しかも英訳……」というのが正直な第一印象。

最近、肺がんや大腸がんの治療には、がん細胞に見られる特定の遺伝子変異をターゲットにした「分子標的薬」が使われている。この薬は特定の遺伝子変異がある人にだけ効くので、投薬を始める前に、その遺伝子変異があるかないかを調べなければならない。今回の機器は、その特定の遺伝子配列のみを調べるもので、犯罪や親子鑑定などに使われる全般的な DNA 解析器とは違う。

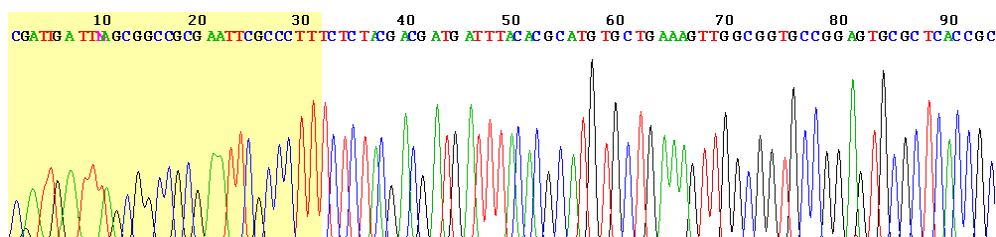
し、しかし、それにしても、日常生活には縁のないレベル。

でもまあ、DNA 関連は初めてじゃないからまだいい。2、3 年前に初めてやったときは、まあ大変でモンじゃなかった。日本語の原文を読んでもサッパリ意味がわからない。日本語のグーグルで DNA の基本的な説明を探して読むけれど、わからない言葉ばかり使って説明してある。で、そのわからない言葉を新しく検索して説明を読むと、これまた 1 行に 2 つくらいの割で理解できない言葉が出てくる。さらに、その理解できない言葉を調べる。自分でメモと用語辞典のようなものをつくって、新しい言葉と概念を理解しようとする。が、なんといってもわたしは基本的に DNA に興味関心がないから、調べたことがてんで頭に残らない。医学部に行かなくてよかったー（入れる可能性もまるでなかったけれど）。

知恵熱が出そうだったが、2 時間その作業を繰り返していると、やっと、何となーくわかりかけたような気がしてきた。並行して英語でグーグル検索もする。英語の説明のほうがシンプルでわかりやすいことも多いのだ。理解したら、自分のメモにコピー&ペーストして、フムフム、英語ではこういう風に書くのね、というのにも慣れておく。

これでやっと英訳開始。もちろん、その後もマメにグーグル先生にお尋ねし、

自分のメモを何度も見直しつつ翻訳する。



こんな、100%は絶対理解できない文書を訳していると、わたしはいつも目の前に、色と大きさの違うたくさんの箱があって、翻訳はその箱を順序正しく並べていく作業だと感じる。箱の中身を正確に理解する必要はない。しかし、箱の色と大きさだけは正確に識別できなければいけない。そうすれば、適切な箱、すなわち単語を選んできちんと並べられ、意味の通る文がつかれる。

では、だいたいどのくらい正確に原文を理解していないといけないか？ わたしは最低 30%だと思う。

え、たった 30%？ それでまともな訳文に仕上がるの？

そりゃもちろん 50%、いや 70%のほうがいい。だけど、無理ですよ、細かいことを全部キチンと理解するのは。わたしは私大の社会学部の出身で、理科の授業は高校止まり、一応は生物 II も化学 II も習いました、って程度。そのレベルだと、DNA だけじゃなくて、山ほど出てくる化学薬品の性質とかもてんでわからないけれど、一々調べてたら納期に間に合わない。

ただ、全体的な、何がどうしてどうなった、だけは確実に押さえておく。そして、訳文を書きながら、それで理屈が通るかは常に考えている。この論理性は、技術翻訳では大切な要素だと思う。

その分野の専門家が訳せば一番いいのだろうが、その専門家が読みやすい日本語を書けたり、英語に強かったりするとは限らない。ましてや他人の文章を翻訳するヒマなんてなかなかないだろう。そして、科学が進んだ現代では専門が細分化されていて、隣の専門分野はよくわからない、ということも多い。

ま、だから翻訳屋の出番があるわけだ。

(イメージ図は、DNA を構成する塩基配列の読み取りデータ例)